



[ブーケ]

bouquet

7

個人で学ぶ楽しさ、 協働でつくり上げる喜び

＝ 特別企画 I ＝ 香川フルート友の会

聞き手：佐野 靖（徳島文理大学副学長／東京藝術大学名誉教授）



「プログラムの最後は出演者全員がステージに乗ってフルート合奏をする」会の話は

以前から聞いていたし、香川県が優れたフルーティストをたくさん輩出していることは知っていた。

しかしながら、当の「香川フルート友の会」の発表会やフェスティバルを直に聴く機会はこれまでなかった。

長く勤めた東京藝術大学を退任し、徳島文理大学で新たな教員生活をスタートさせてちょうど2年が過ぎようとしたとき、知人を介して、香川フルート友の会を長年牽引されている佐柄晴代先生と都村慶子先生につなげることができた。なぜ香川県にこうした「フルート文化」が根付いたのか、その秘密の一端を探ろうと、

第49回香川フルート友の会発表会（令和8年2月8日、坂出市民ホール）に足を運んだ。



佐柄晴代 先生

香川県在住、出身のフルート演奏者や愛好家が集うグループ。初心者からプロまで、また学生から大人まで幅広く所属し、「クリシュナフルートアンサンブル」「フラウトマジコアンサンブル」「ジュニアフルートアンサンブル」と3つのグループがそれぞれ活躍している。



都村慶子 先生

さまざまな層のフルート愛好者が集う

佐野：「香川フルート友の会」の発足は昭和52（1977）年となっていますが、その成り立ちなどについて教えてくださいいただけますか？

佐柄：昭和49年頃、香川大学に佐倉友章先生というクラリネットの先生がいらして、私やもうちょっと上の代の生徒は佐倉先生にフルートを習っていました。フランスに留学されてクラリネットと併せてフルートも学ばれたようです。その佐倉先生がクラリネットとフルートを集めて演奏会を始めました。知らず知らずのうちに私も加わっていたのですが、フルートが10人ぐらいかな。クラリネットはもう少しいましたね。その後、初代事務局長の吉岡令子先生が中心になってフルートの会を始めました。岡山県でもちょうど始めた頃で、そういうふう各地でいろんなフルートの会ができ始めました。

佐野：会のネーミングは地域でそれぞれなんですね？

佐柄：例えば「岡山フルートの会」など、それぞれが地元につけた名前です。1年ベースで活動しているのは、全国で10数か所ぐらいですかね。

佐野：香川県のこの規模で、これだけの人数が集まるのは、隣の徳島県出身の僕としては驚きでしかありません！

都村：地理的なよさがありますね。広くなく、温暖、災害がない、のんびりした県。練習できる施設や演奏会場、ホールなど環境も整っています。昔から声楽王国って言われていましたね。

佐野：確かに声楽が盛んでしたね。著名な声楽家も輩出しています。近年はフルート王国と言っても過言ではないですね（笑）。東京藝大のフルート専攻の学生にも香川県出身者が多いです。そうした背景には、香川フルート友の会の存在も大きいと思います。会員の数は以前からこんなに多かったのですか？

佐柄：人数はずっと多かったですね。

都村：フェスティバルは100人以上出ていましたね。

佐柄：そうですね。コロナ禍ではどうしても減ってしまっただけ。それからサンポートホール高松ができたとき、2004年でしたか、みんなに声をかけて、県外も含めて200人ぐらい集まりました。ステージが溢れるぐらい。

佐野：それはまた圧巻でしたね！ 数だけではなく、さまざまな年齢層の方がいらっしゃるのもいいですね。

佐柄：今日の発表会では小学校6年生が最年少ですね。最後のあたりに出番がある子たちは、小学校2年生、3年生あたりからずっと続いています。

佐野：彼らは中高に行くとか奏楽部に入るんですか？

都村：香川県は吹奏楽も盛んなので、ほとんどの子が入りますが、入らないで専門の道一筋な子もいますね。

佐野：個人的に音大とか芸大とかを目指す子もいるでしょうし。

佐柄：今日はアンサンブルコンテストの四国大会と日程が重なってしまったので、高校音楽科の生徒の参加は2人だけですが、小中高生で編成する「ジュニアフルートアンサンブル」もあります。

佐野：シニアも多いですね。

佐柄：シニアは増えていますよ。

都村：「フラウトマジコアンサンブル」といった社会人



アンサンブルもありますし、そうしたアンサンブルに入っていない大人の愛好者もたくさんいらっしゃいます。

佐柄：全体で言ったら、少子化の影響でジュニアがちょっと少ないですね。

佐野：大人になっても続けている人は、もちろん仕事や家庭をもっていますから、そんな中、レッスンを受けられているということでしょうか？

佐柄：そういう人もいますが、子育てやお仕事などでできない時期はありますよね。そこがクリアされてからにはなりがちですね。

都村：50代、60代で始める人もいます。大人になって初めてフルートを吹き始めた人も多いです。音色の魅力や手軽さ、華やかな楽器でカッコよく見えるのかもしれないですね。

佐野：この人数を2人で指導していくのは大変ですね。
佐柄：指導者は他にもたくさんいらっしゃいます。プロ、アマ関係なく所属していますので。

都村：音大出身、アマチュア、ジュニアの3つの層になっています。

フルートの魅力とは

佐野：フルートの魅力について、ひと言で言い表すのは難しいかもしれませんが、先生方はどんなふうに感じられていますか？

都村：1人でも2人でも、10人でも100人でもそれなりに仕上がります。オーケストラの曲をフルートで演奏してどうなるのかな？ とはじめは私も思いました。もちろん何の曲でもできるわけではないですから、フルートに向く曲を扱いますが、大勢でやる楽しみ、1人でやる楽しみ、色々な楽しみ方ができます。持ち運びも便利だし（笑）。

佐柄：フルート奏者が多数集まってフルートオーケス



トラになると、楽器1本ずつがパイプなので、最終的にはパイプオルガンみたいな響きが実現できます。それが理想ですね。

都村：ピッコロフルート、それからアルトフルート、バスフルート、コントラバスフルートと多彩な種類があります。各フルートがオーケストラの各楽器の役割を担うわけです。日本人は既成のものを少し変えて作り出すのが上手なので、日本製のバスフルートとかコントラバスフルートは素晴らしいですよ。

佐野：既成のクラシック音楽やポピュラー音楽などを編曲したものから、フルートオーケストラのために書かれたオリジナル曲まで演奏できますね。

都村：作曲家の廣瀬量平さんは、フルートオーケストラで『ブルー・トレイン』という名曲を作曲されています。日本フルート協会ができて発展していく段階で、そういう作曲家も生まれて、相乗効果で日本のフルート音楽がとても盛んになりました。日本人は、自然美を感じさせてくれるフルートの音色が好きなのでしょうね。海外だとフルートソロでの演奏会は少ないと聞いていますが、日本はフルートソロの演奏会もかなり多いと思います。

自分で気付く大切さ

佐野：指導する上で大事にされていることを教えてください。

都村：アマチュアといえども、やっぱりいいものを目指しながらやりたいと思います。フェスティバルでも、レベルが高いか低いかって言われたら、そんなに高いわけではないけど、いつも高いところは目指してやりたいなと思っています。

佐柄：教える側が諦めないことですね。もうちょっといけると信じて。

佐野：諦めずに待つのは難しいですね。

佐柄：邪魔さえしなければいいんです。自分から気付くまで。

佐野：深いですね。諦めず待つというのは誰にでもできることではありません。

佐柄：そんな大袈裟なことじゃないですよ。みんないい子だから。

佐野：ところで、ぐっと伸びる子とそうはいかない子の違いってというのは？

都村：人それぞれ伸び方は違って当然でしょうが、正しい基礎・基本を身に付けられるかどうかが大きいですね。基礎・基本は長く付き合っていけるものだし、聴く力も含めて。それから、先ほど佐柄先生も言われたけれども、練習の意味などを自分から気付くことが大切ですね。

佐野：そうなるには教える側の関わり方がとても重要です。

都村：香川フルート友の会では、会の顔とも言えるフェスティバルや少し高いレベルのプログラムに挑戦できる発表会が柱となって活動が展開されていますが、これらの運営にも会員それぞれが役割をもって関わるようになっていきます。自分は何ができるのか、何をすればよいのかを考え、みんなで協力してひとつのイベントをつくり上げています。誰か1人が頑張るというのではなくて、みんなで頑張っていくことが、うまく働いていくのでしょうか。やらされているというふうにはしたくないですよ。



佐野：システムのには、会員が一律に会費を払うかたちですね？

佐柄：年会費3500円でフルートが吹けます。運営に関しては、日本フルート協会が始まった頃から、とにかくボランティアで運営しようと吉田雅夫先生がおっしゃっていて。なかなかそうもいかないケースもありますが、そうした気持ち、精神はこれからも大事にしたいですね。

佐野：会員一人一人がフルートを学び、発表会にチャレンジし、みんなでフェスティバルをつくり上げる。ボランティア的な運営も含めて、それらのプロセスそのものが「生きる力」が育つ仕組みになっていることを実感しました。本日は発表会前のお忙しいところ、本当にありがとうございました。



日本めぐり

日本各地で文化や芸術を支えている方々取材する本連載、
今回は、幼児・児童向けの木琴を製作しているメーカーを訪ねました。

第13回 群馬県前橋市

小林昭義

みやま
有限会社三山楽器

前橋市にある三山楽器は、文部科学省音楽教材指定楽器として木琴が使用された頃から、生産し続けている木琴メーカーです。現在は教育用をはじめ、幼児用の「おさかなシロフォン」などを生産し、幅広い年齢層の子どもたちに愛用されています。

木琴の思わぬ試練

——御社における木琴製作の歩みを教えてください。

小林…初めは三山木工として、先代が昭和23年に設立しました。戦後間もない頃、子どもの遊ぶものがなかった時代に、子どもたちのためにとオリジナルの木製玩具を作ったのがはじまりです。昭和32年に木琴が文部科学省指定楽器となった頃、学校とつながりがあったおもちゃ屋さんから「木琴を作ってみないか」との話があり、全音楽譜出版社さんから販売することになりました。当時の小学校では一人一台木琴を持っていたんですよ。ところが今から50年近く前、指定楽器が木琴から鍵盤ハーモニカに変更されました。木琴業界にとっては大打撃です。生産する会社も減っていきしました。私はというと、全音さんに入社して働いていたのですが、退職して家業に入りました。それから木琴製作を続ける

基準にも適合しています。

——木琴においては、どのような基準でS Tマークが付与されるのですか？

小林…対象年齢が1歳半からなので、塗料は舐めてしまっても問題ないか、角でけがをしないか、指を挟まないかなどが見られます。なかでも、マレットの玉と棒をつなぐ部分の強度については力を注ぎました。小さなお子さんはマレットを舐めてしまうことがあるので、お母さんたちが水拭きをします。それを続けることで、万が一玉が取れてしまったら、誤飲する可能性があります。接着剤を変えたり、はめる部分のサイズを微調整したりと試行錯誤して、より安全なものを目指しました。

心地よい音を目指して

——実際、どのような手順で作られるのでしょうか？

小林…まず木材をある程度の太さに切り分け、角を丸く削ります。表面を粗さの違う2種類のやすりで研磨したら、塗装を2回行います。下塗りの状態ではまだざらつきがありますが、もう一度塗装することでツルツとした表面に仕上がります。続いて音程ごとにカットし、土台に固定するための穴を開けていきます。いちばんの要となるのは調律です。鍵盤の裏側を丸く削り、マイクで集音したものを聴きながら調整していきます。同じ種類の木材でも、個体によって硬かったり柔らかかったりするので、いかに同じ音程にそろえていくかが調律の妙です。シロフォンはマリンバに比べて浅く削るので、より木の味わいが出るのが特徴です。

——素材はどういったものを使われているのですか？

小林…現在使っているのは、教育用がホワイトアッシュ、幼児用



小林昭義（こばやし・あきよし）

有限会社三山楽器2代目、代表取締役社長。
木琴だけでなく、無印良品、ジャノメミシン、コーヒー機器のカリタなどあらゆるメーカーの部品を製作してきた。

ために、木工品の受注生産と並行するようになります。

——木琴業界を震撼させる出来事ですね。幼児用木琴を作りはじめたのは、そのあとからですか？

小林…そうですね。カラオケブームに肖り、マラカス、ギロなども作っていたのですが、他国がさらに安いものを販売するため、いずれも続けるのが困難でした。そこで約30年前から、新たに幼児用木琴を製作し、[※]OEM商品としてポーネルドさんで販売を始めました。年を追うごとに数が出るようになってきたので、だんだんと木工品から手を引いていき、現在はほとんど木琴のみを作っています。もちろん、教育用木琴も作り続けています。

——幼児用木琴は、教育用と比べてどのような違いがあるのでしょうか？

小林…学校用では扱わないような簡単な曲を弾くと思うので、鍵盤数は1オクターブほどにして、その分良質な木を使っています。ポーネルドさんにはデザイナーがいるわけではなかったのですが、デザインから自社で検討しました。また、S Tマークという玩具の安全がブラジルカリンという木で、ポリビアから取り寄せています。硬く、空気が通りやすいため、響きが良い木材。ところが、南米では植林が進んでいないため、資材が尽きてしまった場合に新たな木材を使わなくてはなりません。そのため、日頃から新しい木を取り寄せて試作しています。

——木が変わることによって、音はどのくらい変わってしまうのでしょうか？

小林…音の伸びが違ってきますね。丸くて柔らかく、余韻のある心地よい響きかどうかを聴き分けて選びます。

——木琴は今でも学校で多く使われる楽器ですが、扱い方で注意すべき点がありますか？

小林…木は呼吸をしているので、湿気が入ってしまうと音が狂ってしまいます。そのため風通しが悪く、暗所で気温が一定になるような場所で保管していただきたいです。木の仕入れ時も、できるだけ気候の同じような場所・時期を選んでいきます。でないと、木が縮んだり膨らんだりしてしまうんです。無垢材になればなるほど、デリケートなんですよ。

——最後に、今後のご展望をお聞かせください。

小林…少子化により購買者が減少していく中で、幼児向けだけでなく、シルバー向けの自社オリジナル商品を作って販売していきたいと考えています。昨年から前橋市の取り組みで、前橋工科大学デザイン工学科の学生がデザインした木琴を製作しているのですが、その中で作ったものを11か所の高齢者施設に贈呈しました。そういった流れから、同大学の生命工学の教授に、木琴の音から感じる心地よさと脳の関係を研究していただいたので、その結果を活用しながら、納得のいく木琴を作り出したいと思っています。



ブラジルカリンの木材



はじめに木材をカットしていく



やすりの第一段階



下塗りをした木材



固定するための穴を開ける



マイクで集音しながら、鍵盤の裏を削る



本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第19回は、今春栗ヶ沢中学校をご退職された岡本弘次先生が、これまでの教員経験を通してお考えになる、生徒指導における音楽教育の大切さについてつづっていただきました。

岡本弘次（おかもと・こうじ）
松戸市立和名ヶ谷中学校 校長（現職）

第19回 岡本弘次 先生（松戸市立栗ヶ沢中学校 第20代校長）

歌は心 ～「音楽は心の生徒指導」が紡ぐ、絆と成長の物語～

伝統に繋がれた「音楽の街」の誇り

千葉県音楽教育、とりわけ松戸市の音楽活動は、全国に誇れるほど大変充実したものです。

市内の小中学校では、日々当たり前のように美しい歌声が校舎に響いています。

この活発な活動の背景には、千葉県音楽教育研究会（県音研）が
長年築き上げてきた強固な伝統があります。

特に毎年11月頃に開催される研究大会は、県内各地の指導者が一堂に会する歴史ある研鑽の場です。
私自身、昨年は会長という大役を仰せつかり、県内全域の先生方の熱意に触れる機会をいただきました。

優れた作曲家や指導者を招聘し、理論と実践の両面から日々研究を深める。

こうした県音研の組織的な活動と、指導者同士の絆こそが、

千葉県全体の音楽教育のレベルを底上げしている原動力であると確信しています。

「合唱は生徒指導だよ」という言葉との出会い

この言葉に初めて出会ったのは、私がまだ駆け出しの教員だった頃です。当時の校長先生が好んで使われていた言葉でしたが、当時の私はその真意を十分に理解できず、「音楽という表現活動が、なぜ生徒指導と結びつくのだろうか」と、どこか遠い世界の出来事のように感じていました。若さゆえに、音楽は純粋な芸術表現であると強く言い切りたい気持ちもあったのかもしれません。

しかし、月日が流れ、私自身が校長として栗ヶ沢中学校に着任した際、その認識は大きな転換期を迎えました。



当時、学校は生徒指導上の課題を少なからず抱えていました。停滞した空気を打破し、少しでも明るく活気ある学校にしたい。その一心で、私は生徒たちに「笑顔での挨拶」と「仲間を大切にすること」を愚直に語りかけ続けました。

思春期という多感な時期にあり、時に悩み、葛藤する生徒たち。彼らと向き合う中で確信したのは、音楽には「乱れた心を整え、穏やかに耕していく大きな力」があるという事実です。

本校では「挨拶」と「仲間を大切にすること」を教育の柱に据えていますが、それらを繋ぐ中心にあるのが「歌声」です。

象徴的な舞台が、森のホール21（松戸市文化会館）で開催される合唱祭です。全校生徒はこの大舞台を目指し、クラスで声を掛け合い、時にはぶつかり合いながらも、一つの響きを作り上げていきます。本番では私自身も楽器を手に取り、生徒・職員が一丸となってステージに上がります。

教職員と生徒が音楽を通じて共感し、心が通い合う瞬間。その積み重ねこそが、荒れた心を癒やし、主体的に学ぶ姿勢を育んでいく。かつて違和感を覚えたあの言葉は、今、私の中で「心を通わせる生徒指導」の実践として、確かな手応えに変わっていました。

卒業式に響く「心の歌声」

日々の歌声活動で耕された心は、卒業式という最も厳粛な場で最高の輝きを放ちます。旅立ちの日、三年間で培った「主体性」と「絆」を胸に、卒業生が心を込めて歌う姿には、言葉を超えた感動があります。「歌は心」——。感謝や決意が体育館いっぱいに響き渡るとき、音楽が教育において果たす役割の大きさを痛感せずにはられません。

結びに代えて

音楽教育とは、単なる技能の習得ではありません。歌を通じて互いを認め合い、調和を図るプロセスそのものが、次代を担う子どもたちの人間性を豊かに育みます。

これからも、千葉県音楽教育研究会が守り続けてきた伝統を大切にしながら、子どもたちが歌声と共に笑顔で成長できる学校づくりに邁進してまいります。

教育と音楽の間で 多様性を生かす実践の現場

＝ 特別企画 2 ＝
瓦田 尚 先生



続いての特別企画では、教育と音楽それぞれのフィールドで躍進される先生をご紹介します。

瓦田尚先生は、都立高校教員として特別支援教育などにご尽力される傍ら、
自らが主宰するオーケストラで指揮者を務めていらっしゃいます。

両分野での取り組みは多数のメディアで注目されています。

生徒に対する思いや、音楽活動と教育のつながりについてお話を伺いました。

PROFILE

瓦田 尚 (かわらだ・ひさし)

岩手県釜石市出身。多摩高校、荻窪高校、中野特別支援学校（センター的機能スーパーバイザー）を経て現在北豊島工科高等学校主幹教諭（進路指導部主任）。大学在学中にアマチュアオーケストラMusica Promenadeを立ち上げ、代表・指揮を務める。釜石市での復興演奏活動が評価されウィーン・フィル＆サントリー音楽復興祈念賞を2度受賞。映画『オケ老人！』『ペーターヴェン捏造』にも出演、音楽監修を務めた。

歩みの原点

―― まずは、高校の教員を目指されたきっかけについて教えてください。

瓦田：もともととは特別支援学校の教員になりたかったです。ですが当時は特別支援教育が始まったばかりで、一般の小・中学校や高校にもさまざまな支援を必要とする子たちがいるのに、その子たちへの十分な対応ができていない実態を目の当たりにしました。そこで、特別支援学校に行くよりも、知識をもったうえで一般の学校に行ったほうがいいのではないかと思います。高校の教員になりました。

―― 当初、特別支援学校の教員を志望されたのはどうしてですか？

瓦田：僕は小児喘息を患い、小学校4～6年生まで盛岡にある病弱養護学校に通っていたんです。入院しながら隣にある養護学校で学ぶ日々でしたが、そこでは自分たちの健康課題と向き合いながら、やりたいことを選んで学ぶことができました。少人数学級なので先生も一人一人の学習状況に応じたサポートを考えてくれて、学校生活がとても楽しかったんですね。その頃から困っている人を支える仕事っていいなと思っていました。

―― 幼い頃のご経験が今につながっているのですね。一方で、音楽との出会いはどのようなものでしたか？

瓦田：幼い頃からフルートを習っていました。フルート奏者で指揮者の山崎眞行先生に教えていただいたことが、音楽との出会いの中では一つ転機だったと思います。中学・高校では吹奏楽部に入り、打楽器やコントラバス、チューバなどを演奏していました。ただ、中学校では部員が僕一人だった時期もあったんですよ。

―― お一人ですか？！

瓦田：入部時には何人かいた3年生が夏のコンクールとともに引退し、1年生の半年間ほどは顧問の先生と二人きりでした。でも先生がとても熱心な方で、「後輩が入ってきたら君が全部のパートの指導をできるように」といろいろな楽器を触らせてくれたんです。そのおかげで、ひと通りの楽器の仕組みや演奏の仕方、音色などを理解することができました。その後、大学生でオーケストラ団体を立ち上げ今に至ります。

―― 瓦田先生が主宰されるMusica Promenadeは結成から20年以上続いていると伺いました。コロナ禍や団員確保などの事情からアマチュアの団体は存続が難しい中で、現在も活動されているのはすごいですね。

瓦田：大学や地域のアマオケに空きがない状況で、それなら自分でつくってみるかという、そんな軽いノリからのスタートでした（笑）。ある意味ちゃんとした組織にできなかったことがよかったのかなと思います。定期演奏会のスタイルを取らず、その都度やってみたいことをみんなが力を出し合って育てる形にこだわってきました。組織として運営するには規約や体制を整え、その組織を維持する活動が求められますが、音楽を純粋に楽しむことを優先してきたのが今につながっているのかもしれないですね。



社会科（現代社会）の授業で、性の多様性について説明する瓦田先生

多様さが受け容れられる教室

―― 教師としての話題に戻ると、生徒と日々関わる中で大切にされていることはありますか？

瓦田：高校生の場合には、対等な人間として関わることを少し意識しています。特に私がこれまで勤めてきた学校、いわゆる進路多様校と呼ばれる学校には、貧困や複雑な家庭環境、いじめによる不登校の経験など、あらゆる事情を抱えた子たちがなんとか通っているという場合も少なくありません。生徒がそれぞれの人生を歩んできた中で、今たまたま僕の目の前にいてくれているだけなのだから、自分の指導で生徒の人生を劇的に変えようとはあまり考えずに、今の状態をどのように支えるかを大事にしています。彼らが自ら成長していくことを僕が邪魔したくないという気持ちが根底にあります。

―― 生徒一人一人の意思を尊重されているのですね。

瓦田：ある意味で世の中の不条理にさらされてきたので、大人への不信感をもっている子もいます。そのぶん正義感が強くて、他者が直面する不条理を彼らは自分ごととして考えることができます。就職する子もいれば進学する子もいるし、それぞれが異なる悩みを抱えていることも彼らは実感しているのでしょうね。教室の中がすでに多様なので、いろいろな考え方があって自由に発言していいんだと思ってもらえるようにすることが教師の役目だと思います。この人と、あるいはこの場だったら一緒にいてもいいと思える、その1歩がうまくいかないだけで、学校や授業に出られなくなることもある。学校のルールで何をさせるかを考えるのではなく、まずは信頼関係がベースにあるべきなのです。

―― 生徒のありのままを受け容れる瓦田先生の姿勢が教室の安心感を生み出しているように感じます。

瓦田：多くの高校が入試によって一定水準以上の学力の子を集め、校則によって表面的な統一を図る。みんなで同じ目標に向かい、唯一の正解を見つけようと生徒も教員も努力する。基本的にはそうあるべきだと思うのですが、そういう場って本質的な多様性と少し違う気がしませんか？僕はそういう感覚の人も学校現場にいることが大事なと思っています。

―― 前任校では、そのような思いから不登校の生徒の居場所づくりにご尽力されたと伺いました。

瓦田：学校側に少しでも不登校をつくり出している原因があるのなら対策を取らないといけません。高校の不登校支援は、義務教育ではないという要因から制度上とても遅れています。しかし義務教育とは自治体が設置する義務と、親が子どもを学校に通わせる義務のことですから、本人が学ぶ義務ではないんです。学校で学びたいという気持ちが本人にあるなら、その教育を受ける権利をどうやって守るかという仕組みを学校

側でつくる必要があると思います。

—— 生徒を変えるのではなく学校の意識改革が重要なですね。取り組みの成果は実感されていますか？

瓦田：少しずつですが、学校の体制や教員の感覚も変わってきています。東京都では校則の見直しを行い、ホームページへの掲載を義務付けました。さらには毎年検討を重ね、できる限り生徒の意見を反映させるという仕組みになっています。こども家庭庁からこども基本法が出されてからは、より子どもの意見表明が尊重され、学校が生徒の安心できる居場所であらねばならないという流れができてきています。生徒の意見全てが通らなくても、大人が聞いて動いてくれたと思えることが重要で、その動きが進んでいるのはうれしいですね。



取材は2026年4月28日、北豊島工科高等学校で行われた

教育と音楽を往還する中で

—— 瓦田先生は指揮者としてもご活躍されています。指揮者も演奏者をまとめて導く立場だと思いますが、教師としての立場と共通する部分はありますか？

瓦田：それは大いにありますね。そもそも僕はプロではないし、オケのメンバーよりも音楽的に優れているわけでもない。団員の皆さんそれぞれがやりたいこと、奏でたい音楽を調整する立場だと思っています。教師のときも同じというか、このおもしろいキャラをどうやったら全体に生かせるかを音楽でも、楽団の運営でも、学校でも常に考えています。

—— 学校現場と同様に、音楽の場でも相手を尊重する姿勢を大切にされているのですね。

瓦田：この楽団に所属している人は年齢層も幅広く、それこそ教室のように多様な場なんです。ただ、子育て世代も多く、仕事と家庭の両立が大変で音楽から離れる人がほとんどです。それをどうにか食い止めたくて、うちでは子どもと一緒に連れてきて練習に参加できるようにしました。楽団の資金で練習場に託児サービスを呼んだこともあります。皆さんもその状況を快く受け入れてくれています。そういう自然体な場がずっと音楽にもいい効果を生むと思っています、その

時々で柔軟にスタイルを変えながら演奏会に挑戦しています。

—— 年齢や立場、経験も異なる方々と一緒に一つの音をつくっていくことは大変ではないですか？

瓦田：ある程度、僕の一存に委ねられている部分もあります。一見すると団員を尊重することと真逆のようですが、僕の好き勝手にするのではなく、団員の皆さんが納得できるような音楽を追求しますし、お互い合意のうえで、それぞれのよい部分を引き出しつつ全体としてまとまるよう、指揮者として判断しています。運営も音楽も最終的には全て自分が責任をもつという覚悟でやっています。

—— 音楽活動で得た経験が学校生活に生かされているとすることはありますか？

瓦田：そうですね、やっぱり学校以外の友達や知り合いがたくさんできたことは仕事に生きていると思います。この仕事をしていると、どうしても教員以外の人と付き合う機会が減ってしまいますよね。だから教員以外の人と会うこと自体が僕の中ではとても新鮮で。年齢も仕事も違ってふだん全く接点のない人たちと一緒に音楽を奏でる営みは、大きく言えば、社会の動きを肌で感じるような感覚なんです。その感覚をもち帰って生徒と接することが大切かなと。音楽に限らず、趣味などをもって外とつながることはすごく大事で、それを学校生活や生徒たちに還元できるとよいですね。だから先生自身がまずは学校以外で過ごす時間も大事にしてほしいですし、その姿を伝えて子どもたちの世界を広げてあげてほしいなと思います。



ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞を受賞したMusica Promenade第14回演奏会

上野耕平の crossing [クロッシング]

高知県高知市と吾川郡いの町を結ぶ、とさでん交通伊野線。かわいい路面電車の車両が全長約11キロの道のりを行く。市街地を路面電車として走り、鉄橋で川を渡って交差点に差し掛かると、次は狭い旧道をスリリングに抜ける。かと思えばアップダウンのある専用軌道も元気に走る。といった具合に11キロに見どころがギュッと凝縮された路線だ。

終点の伊野停留場は、パッと見てそこで路面電車が発着しているとは思えないくらいにあっさりと呼んでいる。時間になるとそこへやってくる電車。車両が入るとやっと終点・始発の停留場としての働きが見えてくるのも面白い。

「路面電車が走る街には活気がある」。これは僕が全国各地を旅して感じた持論だ。地域の人が気軽に乗れる路面電車がそこにはある。



第24回

とさでん交通伊野線



文・写真：上野耕平（うへの こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォーン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、PANDA Wind Orchestraコンサートマスター。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「妄想トレイン」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

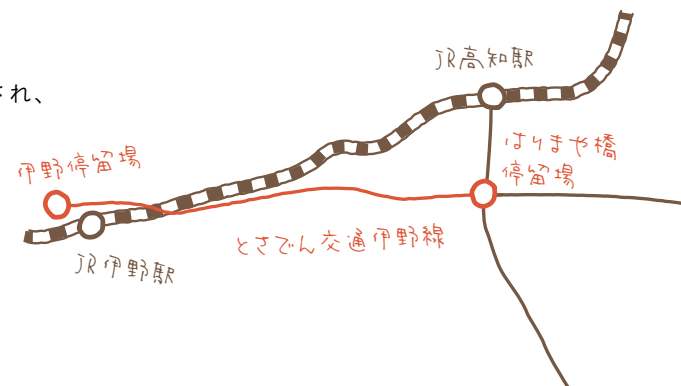
上野耕平コンサート
情報はこちら▶▶▶

<https://uenokohei.com/concert/>
(上野耕平公式サイトより)



編集部メモ

とさでん交通の路面電車は伊野線の他に後免線、棧橋線、駅前線が運行され、日本の路面電車における路線総延長が広島電鉄に次ぐ25.3kmに及ぶ。現在、伊野停留場から発着する電車の本数は1時間に1～2本ほど。線路の末端部は、停留場隣の店舗の駐車場代わりになっているそうだ。



Contents

- 04 〔特別企画Ⅰ〕 個人で学ぶ楽しさ、協働でつくり上げる喜び（香川フルート友の会）
08 〔連載〕 日本めぐり 第13回 小林昭義（有限会社三山楽器）
10 〔連載〕 次代につなぐ 校長先生の講話 第19回 岡本弘次
12 〔特別企画Ⅱ〕 教育と音楽の間で ～多様性を生かす実践の現場（瓦田 尚）
15 〔連載〕 crossing 第24回 上野耕平

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.26をご清覧いただき、ありがとうございます。
老若男女の愛好家が集まる香川フルート友の会。
真剣な眼差しで演奏する皆様の姿に、フルート愛を感じました。
なかでも合奏は圧巻で、柔らかな音一つ一つが重なり合って、
おもちゃ箱を開いたかのような高揚感がありました。
長年にわたり子どもたちに木琴を届け続けている三山楽器さんは、
ご家族で取材にご対応くださいました。
仲睦まじく温かな雰囲気取材が進む中、音楽教育の一新によるご苦労、
そして木琴への熱意が静かに伝わってきました。
紫ルックがトレードマークの瓦田先生は、
教員とアマチュアオケの指揮者という二つの顔をもっているらしいです。
その両輪を生かし、多様な背景をもつ生徒一人一人の心の向く先を大切に、
サポートされている様子がうかがえました。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

Staff

Art Direction & Design(表紙・本文):中澤美羽

DTP:浅野真理子(マール)

印刷:新日本印刷

製本:ヤマナカ製本

